

ゴフマン社会学の脱皮の跡 : 彼の修士論文(1949) に関する一考察

著者	薄井 明
雑誌名	北海道医療大学看護福祉学部紀要
号	18
ページ	67-76
発行年	2011-12-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00006340/

<研究報告>

ゴフマン社会学の脱皮の跡 —彼の修士論文（1949）に関する一考察—

薄 井 明*

抄 録：アーヴィング・ゴフマンは彼の博士論文（1953年）でその新しい社会学理論を初めて定式化した。しかし、博士論文のフィールドワークに着手したとき、おそらく彼は相互行為秩序に関する構想をすでに着想していた。1949年に提出されTATを批判的に論じた彼の修士論文は、その最終章で対面的相互行為の研究についてごく簡略な見取り図を示している点で、実質的にゴフマン社会学の“誕生”だといえる。ただ、修士論文における論理が非常に入り組んでいて曲がりくねっているために、ゴフマン研究者のほとんどは、彼の修士論文が対面的相互行為をみる視角の転回を成し遂げたことを見抜くことができなかつたのである。

キーワード：ゴフマンの修士論文、ゴフマン社会学、相互行為秩序

1. 序—問題提起

すでによく知られていることだが、『日常生活における自己呈示』(Goffman 1956, 1959) [以下『自己呈示』] を著した社会学者ゴフマン (Erving Goffman) が、その後「儀礼」「遊戯」「ゲーム」「動物のテリトリー行動・挨拶行動」など多様なメタファーを用いながら数多くの著作を通して追究したのは、「相互行為秩序 (the interaction order)」論という一貫したテーマであった (Goffman 1983: 2)。その最初の定式化は、彼がシカゴ大学に提出した博士論文にみられる (Goffman 1953: 343-360)。

しかし、ここで一つの疑問が生じる。「ゴフマン社会学」と呼ぶべき「相互行為秩序」論が博士論文で定式化されたことが事実だとして、それをもって彼がこの視角を博士論文の調査・執筆の段階で“突然”発想したと結論づけてよいのだろうか。普通に考えれば、いくつかの段階を経てゴフマン固有の視角として結実していったと想定するのが自然であろう。博士論文以来30年近く彼の基本的な視角は変わっていないのだから、“突然”その視角が確立したとはなおさら考えにくい。では、それはどのような過程を経て形成されていったのか。

従来のゴフマン研究では、最初の著書 (his first book) 『自己呈示』(1956年・1959年) を起点とし、その後の著作を時期区分して、相互の関連を解明するというのが研究の常道であった。そうした流れの中では『自己呈

示』以前の最初期の著作 (his earliest writings) は、副次的な扱いか、『自己呈示』の前史の位置づけ⁽¹⁾しかなくされてこなかった。彼の博士論文 (1953年) を固有の意味でのゴフマン社会学の“誕生”とする研究も出てきているが、そのように扱われても、「相互行為秩序」論の形成過程を辿る道はそこで途絶えてしまう。代表的なゴフマン研究者であるスミスとヴァンカンは次のように述べる。

「1949-51年のいつか、すなわちシェトランド諸島の小さな小作農コミュニティで行われた博士論文の調査過程で、ゴフマンが生涯にわたり拡大・深化させることになる社会学の構想を考案した。」(Smith 1999: 1)

「間もなくその途上でヒューズからだけでなくウォーナーからも遠ざかっていき、自分自身の問題設定を構築するだろう。彼 [ゴフマン—引用者] は、20年間の研究プログラム [相互行為秩序論—引用者] をもって霧に包まれた岩礁 [シェトランド諸島のアンスト島—引用者] から戻ってくる。」(Winkin 1988: 53)

両者ともに、1949年12月から1951年5月までの博士論文の調査期間＝「シェトランド期」(Burns 1992: 11) のどこかでゴフマン社会学が“突然”に近い形で誕生したと考えているようである。

実際、ゴフマンは草稿等を残さなかつただけでなく、手紙などの個人の痕跡も消し去っていったため、ゴフマ

* 人間基礎科学講座

ン社会学の形成史を遡ろうにも、手がかりがごく少ない状態であった⁽²⁾。参照できる文献は、博士論文以前の2つの公刊論文（「階級ステータスのシンボル」「カモ」をなだめることについて）と修士論文だけである。2つの公刊論文に関しては、これまでの研究では断片的な形でしか言及されない⁽³⁾か、論じられてもゴフマン社会学の形成史とは異なる視点からであった（Gonos 1980；Fine 1999）。TAT〔主題統覚検査〕を中心に論じたゴフマンの修士論文に至っては、のちの彼の理論との関連性が見出せないためか、2人の論考（Winkin 1988, 1999；Smith 2003, 2006）を除き、ゴフマンの著作リストの先頭にタイトルのみが載せられる状態が続いてきた。

本論考では、ヴァンカンとスミスの研究も参考にはするが、彼らとは少し違った見方を仮説として提示する。それは、ゴフマンが修士論文を完成させるまでの過程で「相互行為秩序」に対する基本的な視角をすでに形成していたという見方である。スミスがゴフマンの修士論文を「さなぎのゴフマン（Chrysalid Goffman）」（Smith 2003）と喩え、相互行為秩序論以前の段階にあると規定したのに対して、筆者は彼の修士論文を「ゴフマン社会学の脱皮の跡」と形容し、この論文において彼が実質的に相互行為秩序論の圏内に足を踏み入れていると解釈する。しかし論文執筆の過程で紆余曲折があり、論文の構成や展開が入り組んだものになってしまったため、その点が見えにくくなっている。本論考では、修士論文の研究着手から論文提出までのゴフマンの研究生活史上の諸事実と修士論文の内容・構成をそれぞれ検討すると同時に、それらを相互に突き合わせて、ゴフマン社会学の形成史における修士論文の位置づけについて考察する。

2. 修士論文の執筆過程と最初期論文の布置連関

ゴフマンの修士論文の研究は、指導教官であったウォーナー（W. Lloyd Warner）らの「社会経済的地位とパーソナリティ」に関する研究（Warner & Henry 1948）に触発されて始まった（Goffman 1949：1）。ウォーナーらは、当時人気の連続ラジオドラマ『ビッグ・シスター』に対する聴取者（熟練労働者・ホワイトカラーの夫をもつ主婦）の反応をTATを用いて調べ、専門職・管理職の夫をもつ主婦のそれと比較することにより、社会経済的地位とパーソナリティの間に一定の相関関係を見出せるとした。彼らの研究はゴフマンがシカゴ大学大学院に入学した1945年に開始された。ゴフマンは当初この研究を継承し発展させようと考え、翌46年秋にデータ収集のためシカゴのハイド・パーク地区に住む専門職の夫をもつ主婦50人に対し面接とTATを実施した。

しかし、ヴァンカンの言葉を借りると「社会経済的地

位とTATへの反応の型との相関関係を調べているうちに、調査の道具〔TAT—引用者〕が不相当であり、それゆえ社会経済的地位とパーソナリティの関連を決定することは不可能であることに彼〔ゴフマン—引用者〕は気づき（Winkin 1988：44）、所期の構想は大きく修正を余儀なくされた（Goffman 1949：3）。結局、1946年秋の面接実施から1949年12月に修士論文を提出するまで3年以上の時間が経過することになる。

最終的に書き上げられた修士論文のタイトルは、「絵で描写された経験に対する反応のいくつかの特徴（Some Characteristics of Response to Depicted Experience）」という「少しばかり不可解なタイトル」（Winkin 1988：43）であった。その内容は、ゴフマンが当初考えたウォーナーらの研究の“応用編”とは別物である。論文の前半部は、自ら用いたTATとサンプリング法・変数設定の限界性についての論証である。しかし自らの調査研究を否定してしまうのではなく、彼がTAT実施場面から得たデータを「対人的経験」（Goffman 1949：74）という全く別の準拠枠で解釈し直して、広義の「社会経済的地位とパーソナリティ」研究の範疇にどうにか収めていくというものだった。おそらく、この入り組んだ内容と構成は、ゴフマンが修士論文に着手してからそれを書き上げるまでの過程の紆余曲折を反映していると推察される。

この間に何があったのか。それを探るために修士論文の中身を検討することも必要であるが、それとともに論文の執筆過程と彼の最初期論文の布置連関をみておく必要もあるだろう。この辺りの外的な事実関係と修士論文の内容や構成とを相互に関連づけることによって、決定的に不足した資料状況を補い、ゴフマンの修士論文の解読を深めていくことができると思うからである。

シカゴ大学大学院に入学した1945年秋から博士論文を提出した1953年12月までの8年余りの期間に、ゴフマンは4つの論文を並行または前後して執筆している。修士論文（1949年12月提出）、「階級ステータスのシンボル」（1951年12月掲載）、「カモ」をなだめることについて」（1952年11月掲載）、博士論文（1953年12月提出）の4つである。まず、これら最初期論文に関係するゴフマンの行跡を時系列にまとめておく。

1945年

秋、シカゴ大学社会科学部大学院修士課程に入学する。指導教官は社会人類学者ウォーナーであった。

1946年

秋、シカゴのハイド・パーク地区に住む専門職の夫をもつ主婦50名に対して、修士論文のデータ収集のため

の面接およびTATを実施する。

1947年

大学院生メンドロヴィッツ (Saul Mendlovitz) と親しくなる。交友はゴフマンがエディンバラ大学に行く1949年10月まで続くが、論文「“カモ”をなだめることについて」(1952年11月掲載)の準備をこの交友期間のどこかで進めていた (Mendlovitz 2009)。

1948年

秋学期、バージェス (Ernest W. Burgess) のセミナーで「社会組織におけるステイタス・シンボルの役割」というタイトルのレポート [ゴフマンの学術的著作で確認できる最初のもの] [以下「ステイタス」レポート] を提出する (Goffman 1948)。

1949年

(時期不明) シカゴ大学社会調査研究会の年次大会で、「ステイタス」レポートを基に、論文「階級ステイタスのシンボル」の初稿を発表する (Goffman 1951: 294)。10月、スコットランドのエディンバラ大学社会人類学科の助手になる。12月、シカゴ大学に修士論文 [下表ではMAと略記] を提出する。また同月、博士論文のフィールド調査地であるシェトランド諸島のアンスト島 (Unst) に到着する。以後1年半のうち12ヶ月をこの島で過ごす (Goffman 1952a: 4)。

1950年

夏、アンスト島のホテルで皿洗いを手伝いながら島民に対する参与観察を行う (Winkin 1988: 54)。

1951年

5月、アンスト島での調査を終え、博士論文執筆のためにパリに滞在する。12月、論文「階級ステイタスのシンボル (Symbols of Class Status)」[ゴフマンの最初の公刊論文] [下表ではSCSと略記] が *The British Journal of Sociology* に掲載される (Goffman 1951)。

1952年

5月、審査官のウォーナーやヒューズ (Everett C. Hughes) らに「博士論文の主題文の草稿」を提出する (Goffman 1952a)。11月、論文「“カモ”をなだめることについて：失敗に対する適応のいくつかの側面 (On Cooling the Mark Out: Some Aspects of Adaptation to Failure)」[下表ではCMOと略記] が *Psychiatry* 誌に掲載される (Goffman 1952b)。

1953年

春、博士論文の口頭試問が行われる (Winkin 1988: 81)。12月、シカゴ大学に博士論文「ある島コミュニティにおけるコミュニケーション行為 (Communication Conduct in an Island Community)」[下表ではPhDと略記] を提出する (Goffman 1953)。

これらの関連事項をもとに4つの最初期論文の執筆時期 (準備や掲載待ちの期間を含む) を整理すると、下表のようになる。(確定できる期間は「*」で、可能性はあるが確定できない期間は「?」で表示してある。)

	1946	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953
MA	??**	****	****	****				
SCS			*	****	****	****		
CMO		????	????	****	****	****	****	
PhD				*	****	****	****	****

修士論文 (MA) と博士論文 (PhD) に関して上表からわかるのは、(a) 修士論文の調査実施から論文提出まで3年以上という比較的長い時間を要していること、(b) 修士論文を書き上げた時期と博士論文のフィールド調査実施の時期が連続していること、この2点である。

(a) の点は、着手はしたが途中で方法論に難点を感じていった研究を一定の形に仕上げていく困難さの表れと解釈できる。そこには、ウォーナーに対し学問的に徐々に距離を感じながら⁽⁴⁾、制度上および人間関係的には彼の指導・庇護⁽⁵⁾の下にあった当時のゴフマンの立場も関係していると思う。指導教官たちとは異なる彼独自の視角を形成しつつも、「文化とパーソナリティ」や「階級とパーソナリティ」という問題圏内で修士論文を書かなければならない状況に置かれていたということである。その一方で1947年から49年にかけてゴフマンは、メンドロヴィッツやベッカー (Howard S. Becker)、後年妻になるアンジェリカ (Angelica S. Choate) をはじめ多くの大学院生たちと知的に密度の濃い時間を過ごしている (Winkin 1988: 28-30)。現段階で個々の知的影響は確定できないが、この交流を“触媒”とし⁽⁶⁾ゴフマン独自の社会的な視角が形成されていったと想定すると、修士論文の所期の構想と出来上がった論文内容との隔たりや執筆期間の長さの問題が理解しやすくなる。

そしてこのような想定は、(b) の点につながっていく。すなわち、修士論文を提出する1949年12月までに、上記のような過程を経てゴフマンが「相互行為秩序」に照準を合わせしていたと考えれば、「シェトランド期」のどこかの時点で“突然”発想したようにみえるゴフマン社会学の形成過程が、より無理のない流れの中に収まっていくということである。逡巡⁽⁷⁾がありつつも、博士論文のフィールド調査に着手した当初から、ゴフマン

は自らの社会学的対象領域を「対面的相互行為」とすることにほぼ決めていたと推断できる。その根拠が修士論文の最終章「結論と解釈」の冒頭の一節である。

「社会科学では、人間の相互行為 (human interaction) と、人々がそれについて典型的に抱いている観念とが異なるのが当然だと考えられている。にもかかわらず一方が他方を常に変えていくので、〔相互行為に関する〕観念と〔相互行為の〕実際の間にはきわめて密接な関係があることはよく理解されている。本論文の究極の目標は、この関係の研究に接近することである。」(Goffman 1949: 73) [傍点と〔 〕内は引用者]

文脈上やや唐突で、また内容的に粗削りではあるが、ここで彼が「対面的相互行為」を究明すべき固有の領域として自覚し対象化していることは確かである。そしてこの後段では、「純粋に架空の対人的経験を構成したもの」と「現実の対人的経験を想像力によって事後的に再現したもの」とを対置し (ibid: 74)、彼が修士論文で主題的に検討したTATを前者のタイプの対人的経験に位置づけている。そうだとすれば、まだ扱っていない「現実の対人的経験を想像力によって事後的に再現したもの」を、引き続き博士論文で彼が研究対象としていったというストーリーは、展開として自然であろう。しかし、ここで先走るのは控えよう。修士論文と博士論文の接続関係の前に、彼の修士論文の内容と構成を検討して、この段階におけるゴフマン固有の視角がどのような地点に到達しているのかを理解しなければならない。

3. ゴフマン社会学の「脱皮の跡」としての修士論文

(1) 修士論文の概要

提出された修士論文のタイトルは「絵で描写された経験に対する反応のいくつかの特徴」で、この「絵で描写された経験」とはTAT図版に描かれた場面と人物を指す。彼の関心が被験者の社会経済的地位やパーソナリティその他の属性はなく、パーソナリティ検査に対する被験者の「反応」に向かっていることがわかる。

修士論文の本体は三部構成で、タイプライターで打たれた全80頁の論文である。

「第一部：テスト」では、まず投影法の歴史・方法・仮定を論じる (第一章・第二章)。次に、投影法のうち特にマーレー (Henry A. Murray) のTATの限界性を指摘する (第三章)。その限界性として、反応の「単位一下位単位」の恣意性、ストーリーの重大時点の同定や解釈・要約の困難さ、カテゴリーの扱い方の統計学的な不適切さ、深層心理学の仮定への疑問、「潜在内容」の歪

曲・偽装の問題、図版の登場人物の架空性とステレオタイプ化した反応内容を指摘する。その上で、文芸批評における「形式的」アプローチと「話し言葉とパーソナリティ」に関する言語学的アプローチを援用してマーレーの「投影 (projection)」の捉え方を改変し、TATの反応内容を社会心理学における「ステレオタイプ」の問題に読み換えていく準備をする (第四章)。ゴフマンはここでいったん議論を保留し、第三部への布石を打つ。

「第二部：被験者」では、被験者の社会経済的地位の属性を紹介し (第五章)、その後、自らの当初の調査デザインの限界性を2つの面から指摘する (第六章)。その1つが「サンプル問題」で、知人紹介という方式からくるサンプルの偏りの問題である。もう1つが「領界問題 (universe problems)」とゴフマンが呼ぶもので、より重大な限界性である。最初彼は、社会経済的地位のみ異なる2集団の観察記録を比較すればよいと考えた。しかしデータ分析の段階で、社会経済的地位を表す客観的な指標に種々の操作上の欠陥が明らかになった。例えば「学歴」において、高卒と州立大卒の隔たりと州立大学卒と私立大卒の隔たりは、数直線上は等間隔でも、社会的距離の上では前二者間より後二者間のほうが隔たりが大きいといった欠陥である。こうした欠陥は補正すればよいわけだが、「サンプルを再デザインするには遅すぎる」(Goffman 1949: 36) として、「サンプル問題」と「領界問題」が発覚したために修士論文の当初の目的を軌道修正せざるを得なくなったと彼は論を運ぶ。

そして「第三部：データの分析」で、ゴフマン独自の分析に徐々に移動していく。まず、TATの「客観的反応／投影的反応」という区分を検討する (第七章)。前者は被験者の客観的な視知覚情報しか提供しないため分析から外され、投影的反応が分析の対象となる。しかし投影的反応でユニークなものは少なく、大部分が紋切り型のものである。「絵はステレオタイプ化しており、大部分がステレオタイプ化した反応を呼び起こす」(ibid: 41)。これらの点から「客観的反応／投影的反応」の二分法が退けられ、両者ともにゴフマン独自の意味で「投影」的であるとされる。すなわち「意味は、ある集団の成員が事象のいくつかの側面を選択・分類・組織化する際に従う諸ルールと合致する形で、世界に注入される」(ibid: 42) という捉え直された「投影」概念であり、それはサピアーウォーフ仮説と同じ世界観である。

こうしてゴフマンは「素直な反応 (direct response) / 素直でない反応 (indirect response)」という新たな区分を導入する (第八章)。「素直な反応」は、TAT図版の内容があたかも“現実の”世界であるかのように反応するものを指す。一方「素直でない反応」は、提示された絵を「一時的に“リアルなもの”と決めてかからなけれ

ばならないという義務をどうにかして避けようとする」(ibid: 47) 反応を指す。「素直な反応」を特徴づける局面として「同定 (identification)」と「(人生の) 分かれ道 (turning points)」について詳述し (第九章)、「分かれ道」の箇所では、被験者の反応内容に「愛」「死」といった紋切り型のテーマが選好されること、それらが「危機」と「劇的な出来事」を軸にパタン化されることを析出し、TATの“虚構性”と“作為性”を指摘する。

続く第十章で、「共感」・「内容」・「描写物」の各面で「素直な反応」と対比して「素直でない反応」という類型を析出する。まずTATに対する反応のうち、描かれた状況に「共感」を示すことを回避する反応の出現を指摘し、これによって「素直でない反応」を特徴づける。この非共感的な態度は、「歌うような声調」「平坦で感情のこもらない口調」等のパラ言語情報によって伝達されるとする。次に「内容」に注目し、図版の登場人物を「類型」としてではなく、具体的人物や歴史上の人物などとして扱ったり、非現実的な場面設定をしたり、絵の内容を「象徴」と見なすことで、TATに巻き込まれることを回避する「素直でない反応」の諸形態を指摘する。そして最後に、TAT図版を芸術品や写真のように述べる「描写物」扱いを指摘する。こうして析出された「素直でない反応」という反応様式が、絵で描写されたドラマ (TAT) に対して示されるだけでなく、現実の生活場面でも現れるのではないかと示唆する。

その後、データの性質上かなり均質性を欠く「居間の家具類」という章が続く (第十一章)。彼がハイド・パーク地区の面接調査で集めた主婦たちの「居間の家具類と居間での振る舞い」に関する情報を取り上げ、被験者に特徴的な態度を指摘する。その特徴とは、居間の装飾の様式、講読雑誌、服装、話し方において、この地区の主婦たちが伝統的・慣習的な規範に完全には従わず、少しだけ崩した態度をとるということである。ただし調査法としては杜撰で、被検者 (主婦) における「素直な反応/素直でない反応」の出現と彼女たちの家具類・服装等の選択や話し方の違いとの相関関係を調べてもおらず、ハイド・パーク群と他の群とを比較してもいない。TATに対する「素直でない反応」とハイド・パークの主婦たちが伝統的・慣習的な規範に対してとる態度とに関連性がありそうだと推測されるのみである。

そして、先に触れた最終の第十二章「結論と解釈」に至るのだが、この「結論 (conclusions)」と「解釈 (interpretations)」は複数形である。そして、ほとんど論じられていない「人間の相互行為」の捉え方から彼は書き始めている。前章までより高次の視点から、「純粋に架空の対人的経験を構成したもの」(Goffman 1949: 74) と「現実の対人的経験を想像力によって事後的に再現した

もの」(ibid: 73) とが対比され、TATを用いた面接は前者に属するとされる。この対比を踏まえて修士論文の論述を総括する。その総括だけを読むと筋が通っているようにみえるが、本文の論述はもっと複雑で錯綜している。そうした違和感を感じさせつつ、第十一章で指摘したハイド・パークの主婦たちの態度を「考え方と振る舞い方の規範に対する洗練されたアプローチの仕方」(ibid: 76) と評し、その背景に彼女たちの広い教養と芸術的な余暇活動があることを指摘して修士論文は終わる。

(2) 無理して仕上げられた修士論文

以上、ゴフマンの論の展開に沿って修士論文の論述内容を追ってきた。筆者の読後の感想は、「この論文は整然とした構成になっていない」である。少なくとも通常の論理展開からは相当逸脱している。この点に関しヴァンカンは、修士論文がゴフマン独自の叙述様式の原型であるという評価を下し、次のように述べている。

「一読すればすぐに、考えを提示する仕方がツリー構造をしていることに気づく。これは、彼の後年の著作でとても (あまりに) 多く見受けられるだろう。すなわち、現象AはA-1とA-2に分割され、A-2それぞれ自身が2つまたは3つの亜種に分割され、さらにその中の1つがいくつかのケースに再分割される。このようにしてできる樹形図は決して左右対称ではない。ゴフマンは、たとえスコラ風に考えさせたとしても、ゴシック建築様式で作りはしなかった。」(Winkin: 46)

一見まことしやかな説明であるが、実際にゴフマンの修士論文の概念構成がこうなっているとは思えない。ヴァンカンが指摘するような箇所も見受けられるにせよ (Goffman ibid: 46-65)、ゴフマンの修士論文の“アンバランスな構成”は、十分練られたうえでの“非対称的な分岐構造”ではなく、何らかの事情に強いられて無理をしたがゆえ、または何らかの理由で性急に仕上げたがゆえの“構成のバランスの悪さ”であると判断される。

すでに何度か述べたように、当時のゴフマンは、自らの意思で着手した研究の構想を抜本から変更せざる得ない状況に置かれていた。しかし調査を実施し分析も進んだ段階であって、新たな研究デザインを構想して別の調査を再実施するには遅すぎる時期にあった。調査で得られたデータを活かして、どうにか修士論文にまとめ上げていかざるを得なかったのである⁽⁸⁾。これは、相当に困難な課題である。三部構成の第一部と第二部、そして分量にして全体の約半分が自らの方法論の検討に充てられるという尋常ならざる構成が、彼が置かれた状況の苦し

さを物語っている。

こうした推定を傍証するのが、タイトルの曖昧さである。「少しばかり不可解なタイトル」(Winkin 1988: 43)、「奇妙で省略的なタイトル」(Smith 2003: 648)との評があるように、ゴフマンの修士論文のタイトル“Some Characteristics of Response to Depicted Experience”は、学術論文としては曖昧で多義的である。同じくウォーナーを指導教官とし、ゴフマンの翌年に提出したアンジェリカ〔のちゴフマンの妻〕の修士論文“The Personality Trends in Upperclass Women”(上流階級の女性たちのパーソナリティ傾向)の明快さと比較すると、ゴフマンの特異さがわかる。「絵で描写された経験に対する反応のいくつかの特徴」というタイトルには、少なくとも、TATに対する反応のステレオタイプ性と「素直な反応／素直でない反応」という反応様式の2つの意味を込めていると理解できるが、こうした2つ以上の異質な問題を生硬な1つの言葉に収めようとしていること自体、論文が十分に練られていない証拠といえるのではない。

また、執筆の性急さを示す傍証として、修士論文には似つかわしくない誤記の多さが指摘できる。確認できた綴り字の誤りは12か所と比較的多く、そのほとんどが第三部に集中している(12か所中11か所)。63頁(第三部)では‘...An alternative to this mode of response is to this mode of response is to treat a representation ...’の下線部(原文には下線部なし)を重複して打ち込むという通常考えられない誤りを犯し、かつそれを訂正せずに提出している。こうした誤りをそのまま放置した修士論文が十分な推敲を経ていないことはほぼ明らかである。

これらの点と前項「(1) 修士論文の概要」を総合すると、以下のような執筆過程のストーリーが想定できる。大学院入学当初、ゴフマンは指導教官のウォーナーの研究を継承し発展させようと素朴に考え、1946年秋にハイド・パーク地区で主婦50人を対象にTATを使った面接調査を実施した。その後データの分析に取りかかるが、分析がかなり進んだ段階でTATというパーソナリティ検査法の妥当性に根本的な疑念を抱いていった。それとともにサンプリング法や研究デザインにも疑問が生じて、研究は一時暗礁に乗り上げ、停滞または中断した。この停滞・中断期は短くても1947年の下半期まで、長ければ1949年⁹⁾まで続いたと推測される。その間、何らかのきっかけでTAT調査時に彼が観察した主婦たちの「居間の家具類と居間での振る舞い」の特徴に社会的な価値を見出し、その特徴とTATに対する回避的態度との間につながりを直感して、修士論文を抜本的に再構成した。第十一章「居間の家具類」の問題圏に接続できるように第三部の構成を案出し、比較的短い期間でそれを書いた。その橋渡しの概念が「素直な反応／素直でない

反応」であるが、すでに行っていたTATの批判的検討などによってこの視点の移行が正当化可能と考え、第一部と第二部の基になった内容に手を加えて論の筋道を整え、修士論文を書き上げた。

(3) ゴフマン社会学への視角の転回

論文としての完成度は落ちるかもしれないが、「相互行為秩序」論の形成過程に置いてみると、修士論文はゴフマン独自の社会的な視角への転回を成し遂げているといえる。「素直でない反応に関する章はゴフマンの後年の有名なテーマ『役割距離 (role distance)』(1961年)の先駆をなす」(Smith 2003: 651)というスミスの指摘は正しいけれども、ゴフマンの修士論文はそれ以上の地点に到達している。

まず、彼の修士論文における「素直な反応／素直でない反応」の議論には、対面的相互行為のリアリティへの「のめり込み¹⁰⁾ (involvement)」や「没入 (engrossment)」の問題が実質的に捉えられている。「素直な反応」はTATという虚構に“のめり込んだ”反応だといえるが、こうしたTAT場面の捉え方を現実の相互行為場面にスライドさせれば、対面的活動への「のめり込み」という捉え方が可能になる。実際、修士論文の4年後に提出される博士論文には「のめり込み」を鍵概念として登場させ、「相互行為秩序」論の中で理論化している(Goffman 1953: 247-257)。

また、修士論文でゴフマンは、TATに対する被験者の反応を俯瞰的な視点から対象化し、それを「状況－主体」の構図で捉えている。TAT図版に描かれた経験を“リアルなもの”と感じ、のめり込んでいくナイーブな態度が「素直な反応」である。一方、TATに対して醒めた目で“距離”をとり、期待された標準的な反応から“ずらした”反応が「素直でない反応」である。後者の「素直でない反応」の態度をさらに高次化するかのようになり、ゴフマンは、TAT面接の場面そのものを対象化できる独自のメタ・レベルに視点を“ずらして”いつている。しかも、TAT図版を「純粋に架空の対人的経験を構成したもの」(Goffman 1949: 74)として規定し、その対極に「現実の対人的経験の経過」(ibid: 73)を置いて考えている。修士論文では後者の「現実の対人的経験の経過」の分析を行っていないわけだから、実際の対面的相互行為を次の分析対象としようとしていることはほぼ確かである。

そして、最終章の第一段落にある「〔相互行為に関する〕観念 (conception) と〔相互行為の〕実際 (fact) の間にはきわめて密接な関係がある」(Goffman 1949: 73) [傍点と〔 〕内は引用者]という記述に、修士論文で論じられたステレオタイプ論を重ね合わせてみると、対

面的相互行為における対人情報の対概念「範疇的 (categorical) / 表出的 (expressive)」(Goffman 1951 : 295) の問題をゴフマンはすでに把握していると思われる。また彼独自の「投影」概念は、直後の博士論文における「投企された自己 (projected selves)」(Goffman 1953 : 299-342)、および、「状況の定義」概念を組み込んだその後の議論の先駆をなしている。

以上の点から、ゴフマンの修士論文は、4年後に完全な姿を現す「相互行為秩序」論の問題圏に足を踏み入れているといえる。こうしたゴフマン固有の社会学的視角の形成過程がみえにくいのは、TAT調査から研究を開始したことが足枷となり、それとの格闘が目立つ外見をとらざるを得なかったからである。また、途中で陥った停滞・中断期から“脱出路”発見後あまり時間のない中で1つの論文に仕上げたためか、個々の概念が荒削りで、議論が十分に整理されていないことも影響しているだろう。それゆえ、従来のゴフマン研究では、のちの「相互行為秩序」論との連続性の問題がほとんど論じられてこなかった。スミスはこの連続性に気づいた数少ない研究者の1人である。しかしゴフマン修士論文を「さなぎのゴフマン」(Smith 2003) と形容する彼は、ゴフマン社会学がこの段階ではまだ“成体”の姿を現していないと考えている。これに対して、筆者はこの修士論文を「ゴフマン社会学の脱皮の跡 (抜け殻)」と見なし、脱皮したてだが“成体”になったゴフマン社会学はこの段階ですでに殻の外に姿を現していたと考える。それまでの“しがらみ”を脱ぎ捨てていった跡という意味でも、彼の修士論文は「脱皮の跡 (抜け殻)」であったといえる。そして、その痕跡が残る修士論文の最終章は、いわば「相互行為秩序」論の“予告編”に位置づけられる。このように理解することによって、より統一的で総合的なゴフマン社会学の“実像”に一步近づいていくことができるだろう。もしそのように理解しなければ、修士論文と博士論文とは別人のゴフマンが存在し、「シエトランド期」のどこかでゴフマン社会学が“突然”誕生したという奇妙なストーリーを信じ続けなければならないことになる。

4. 結びに代えて

以上、いまだ闇に包まれたゴフマンの修士論文執筆の過程を解明しつつ、論文の内容と構成の読解を通して、ゴフマン社会学の形成史における修士論文の位置づけを試みた。現段階では、その解釈の多くが仮説の域を出ないことは認めざるを得ない。だが、たとえ仮説であってもそうした推論を重ねて、残された数少ない資料や事実と照合していくことがゴフマン社会学の形成史研究では

不可欠である。物証や証言に乏しく、さまざまな状況証拠を駆使しなければ解明ができない“難事件の捜査”に類似した状況が、そこにはある。

もしかすると、ゴフマンの長い著作リストの先頭にある彼の修士論文は「社会学者ゴフマンの (sociologist Goffman's)」と冠するには早すぎる著作だと考えるむきがあるかもしれない。だが修士論文提出時、彼はすでに27歳になっていた。知的に早熟だったゴフマンが、この段階になっても、社会学における彼独自の視角の片鱗すらみせていなかったとすれば、むしろそのことのほうが不自然である。それに、博士論文の研究テーマで彼の生涯の研究テーマとなる「相互行為秩序」論が、直前に書き上げた修士論文と全く無関係に発想されたと考えるのにも無理がある。こうした点から考えて、ゴフマンの修士論文提出までに彼独自の社会学的視角への転回が成し遂げられていたという本論考の「仮説」的解釈は、ごく常識的で妥当な判断として受け入れられると思う。

ただし、この仮説の提示では修士論文の解釈は完了しない。修士論文だけを考察しても、こうした視角の転回が修士論文における格闘の中から生まれたのか、それとも修士論文の外側で生じた視角の転回が修士論文に影響を与えたのか、はたまたその複合形態であるのかを確定することはできないからである。この問題を解明するには、修士論文に後続または並行して執筆された2つの公刊論文「階級ステイタスのシンボル」と「“カモ”をなだめることについて」に関して、本論考と同様の考察を行っていかなければならない。また、人間関係も含めたゴフマンの研究生活史についてのより詳細な解明も必要になる。こうしたいくつかの作業を経てはじめて、本論考で提示した「仮説」的解釈の妥当性が確定できるのである。こうした意味で、「ゴフマン社会学の形成史」の研究は、いまだ緒に就いたばかりである。

[註]

- (1) スミスは、ゴフマンの博士論文を『自己呈示』の前史として解釈しようとする一般的な研究傾向が的外れであることを指摘している (Smith 2003 : 656)。筆者は、彼の博士論文を起点として設定し、むしろ『自己呈示』の特殊性や暫定性を論じるべきだと考えている。
- (2) ゴフマン研究をめぐる資料状況は、キャヴァン (Sherri Cavan) とシャーリン (Dmitri Shalin) が共同管理するインターサイバーライブラリー *The Erving Goffman Archives* によって変わりつつある。まだ量的に限られているが、「皆無」に近かった以前の資料状況に比べると、ゴフマン社会学の形成および

展開の過程を解明する手がかりは格段に増えてきている。

- (3) 例えば代表的なゴフマン研究書 (Manning 1992) で修士論文に触れている箇所は、「彼の修士論文『絵で描写された経験に対する反応のいくつかの特徴』(1949)を思い出させるやり方で」という語句の1箇所のみである。(Burns 1992)も同様である。
- (4) ウォーナーを慕ってシカゴ大学に入ったゴフマンが徐々にウォーナーに限界を感じていった証拠として、「1945-1950年頃は、ウォーナーの分析はとて革新的でした」(Winkin 1988: 232)や「審査員たちもまた私の博士論文を理解できなかった」(ibid)などのゴフマンの言葉がある。これらから、ウォーナーの影響力が一時的かつ限定的だったと解釈できる。また次のゴフマンの言葉もウォーナーとの距離を感じさせる。「私が研究生活を始めた当時、教授には許可を与える大きな権限がありました。そこで私はそうした許可を得ずに論文を書こうとしたので、私が書いた最初の二、三の論文は、よく考えないで即座に書いたようなものです」(Verhoeven 2000 [1993]: 215-216)。
- (5) ゴフマンが1949年10月から勤めたエディンバラ大学の助手の職はウォーナーの推薦によるものであったし、博士号取得後の一時期は、ウォーナーが設立した社会調査会社 (Social Research Inc.) で働いている。
- (6) これが単なる憶測でない根拠として、ファインとマニングによる第二次大戦直後のシカゴ大学の知的環境に関する考察 (Fine & Manning 2000) がある。そこでは、ゴフマンの最初期論文「階級ステータスのシンボル」への他の大学院生たちの影響が指摘されているが (ibid: 38)、修士論文の執筆期間の後半からは時期が重なっていることから、その影響は修士論文にも及んでいたと考えるのが自然であろう。
- (7) ヴァンカンは、ゴフマンが少なくとも調査の当初はウォーナー流の調査を実施するつもりだったと解釈している (Winkin 2000 [1992]: 201)。調査にTATやロールシャッハ・テストを持参し島民の一人に実施していたことなどがその根拠のようだが、これはゴフマンの逡巡の表れだという逆の解釈も可能である。
- (8) ゴフマンは1949年10月にエディンバラ大学の助手に就くが、就職の前提として博士課程に進んでいることが求められたとすれば (Winkin 1988: 52)、彼は修士論文をどんなことをしても1949年中に提出する必要があっただろう。

- (9) 修士論文の第三部 (の少なくとも一部) が1949年に執筆されたことは、1949年出版の*The Metaphysical Foundation of Modern Physical Science*が本文中および文献に挙げられている事実から間違いない。
- (10) ゴフマンの用語 ‘involvement’ は従来「関与」という訳語が与えられてきたが、意味をとると「のめり込み」という訳語が適している。

[文献]

- Burns, Tom. (1992) *Erving Goffman*, London and New York: Routledge.
- Fine, Gary A. (1999) “Claiming the text,” in (Smith 1999).
- Fine, Gary A. and Manning, Philip. (2000) “Erving Goffman,” in G. Ritzer (ed.) *The Blackwell Companion to Major Contemporary Social Theorists*, Oxford: Blackwell.
- Goffman, Erving. (1948) “The Role of Status symbol in Social Organization,” *The Erving Goffman Archive*. (http://www.unlv.edu/centers/cdclv/ega/documents/eg_burgess.pdf)
- . (1949) “Some Characteristics of Response to Depicted Experience,” unpublished M.A. thesis, Department of Sociology, University of Chicago. (in *The Erving Goffman Archive*.)
- . (1951) “Symbols of Class Status,” *The British Journal of Sociology* 2, 4: 294-304
- . (1952a) “Draft of Ph.D. Thesis Statement,” *The Erving Goffman Archive*. (http://www.unlv.edu/centers/cdclv/ega/documents/eg_thesis_statement_52.pdf)
- . (1952b) “On Cooling the Mark Out: Some Aspects of Adaptation to Failure,” *Psychiatry: Journal for the Study of Interpersonal Processes* 18, 3: 213-31.
- . (1953) “Communication Conduct in an Island Community,” unpublished Ph.D. dissertation, Department of Sociology, University of Chicago. (in *The Erving Goffman Archive*.)
- . (1956) *The Presentation of Self in Everyday Life*, Edinburgh: University of Edinburgh, Social Sciences Research Centre.
- . (1959) *The Presentation of Self in Everyday Life*, New York: Doubleday Anchor.
- . (1983) “The Interaction Order,” *American Sociological Review* 48, 1: 1-17.
- Gonos, Georg. (1980) “The Class Position of Goffman’s Sociology: Social Origins of an American Structuralism,” in Ditton, J. (ed.), *The View from Goffman*, New York: St. Martin’s Press.

- Manning, Philip. (1992) *Erving Goffman and Modern Sociology*, Cambridge : Polity.
- Mendlovitz, Saul. (2009) "Erving Was a Jew Acting Like a Canadian Acting Like a Britisher," *The Erving Goffman Archives*. (http://www.unlv.edu/centers/cdclv/archives/interactionism/goffman/mendlovitz_08.html)
- Smith, Gregory W. H. (ed.) (1999) *Goffman and Social Organization*, London and New York : Routledge.
- . (2003) "Chrysalid Goffman : A Note on "Some Characteristics of Response to Depicted Experience", " *Symbolic Interaction* 26, 4 : 645–658.
- . (2006) *Erving Goffman*, London and New York : Routledge.
- Verhoeven, Jef C. (2000 [1993]) "An Interview with Erving Goffman, 1980," in G. Fine & G. Smith (eds.) *Erving Goffman* [1], London : Sage.
- Warner, W. Lloyd and Henry, W. E. (1948) *The Radio Daytime Serial : A Symbolic Analysis*, Provincetown : The Journal Press.
- Winkin, Yves. (ed.) (1988) *Erving Goffman : Les Moments et Leurs Hommes*, Paris : Seuil/Minuit.
- . (2000 [1992]) "Baltasound As the Symbolic Capital of Social Interaction," in G. Fine & G. Smith (eds.) *Erving Goffman* [1], London : Sage.
- . (1999) "Erving Goffman : what is a life? The uneasy making of an intellectual biography," in (Smith 1999).

A Cast-Off Skin of Goffman's Sociology : A Note on E. Goffman's M.A. Thesis (1949)

Akira USUI*

Abstract : Erving Goffman first formulated the new sociological theory in his Ph. D. dissertation (1953). But it is probable that he had already devised his project on the interaction order when he made a start on the fieldwork for his dissertation. His M. A. thesis, which was submitted in 1949 and critically dealt with TAT, was practically the “emergence” of Goffman’s sociology in that he made a very short and rough sketch of his study on face-to-face interaction at its last chapter. His logic in the thesis was so complicated and winding that most students of Goffman’s sociology have not been able to see that his Master’s thesis accomplished a revolution in the perspective of face-to-face interaction.

Key Words : E. Goffman’s M.A. thesis, Goffman’s sociology, the interaction order

* Department of Integrated Human Sciences